

墓地のほとり

莫土地のほとり

伊承美の、^{シエ}ークスピアの伝説中で、

つともいい子である マミリアス 「妻劇」冬物語
に出てくる早熟

ではあるが可憐な子供。シリイ玉レオンティスと王妃ハーヤイ
アニの間に生まれた小王子。母の無実の罪を悔い、このあまり死す。

が、母をうる王妃と侍女に、（侍） スコライト ゴブリン
地精や悪鬼の言

を聞きはじめるところがある。そらへ嫉妬に

駆りぬた玉の衛兵を引きつれまやつて来て、

王妃を牢獄へ送るのであるが、
この地精や
悪鬼の言

第三幕
第二場

にはきてゝくともできなくが、新の語はくく
まのた。――

――ある教会の墓全地葬のそびり、一人の男

が位んでつた。彼の家は、下層が石造で、上

層が木造だつた。表の窓は往來をのぞき出し、

裏の窓は墓全地り面をのぞいた。その家は古

く教の窓は司祭の所有だつた。しめし（ふ

はエリザベス女王の時代 ~~の~~ 「十六世紀の中
頃の事だ」

の ~~ま~~ の ことだつた。その司祭は結婚してつた

のむ、もつと教会が ~~の~~ ほしくつたし、その

かすりの平水事だった

上、彼の妻は、夜寝室の窓から墓地の見え

るのを、嫌がっていった。彼女は見たと●いつ

た——だが、彼女がどんたんと云ったのは、

おと氣んめけがれないでよろしい。とわか、

彼女はのべつ●に駈きたるるので、司祭もと

うと、村の通りの、ある大きな家へ引越を

こころしん。そしてそのあとへ、ジョン・ポー

ルという●ヤシめ男めはいつて、一人で暮ら

こころしん●~~...~~ ジョ●ははるほが引つた

ン・ポール

み田心め、~~...~~ いくらかケチな男めを~~...~~ 罵りさせて

（その時かた）

ていたことだつたが、彼女は基督教徒では

なく、夏至祭〔六月二日〕だとか、萬聖節〔十一月一日〕

のようなお祭の晩は、家についてお祈りをし

いたことはあつた。彼女は血走つた眼をし

ていて、それは見るも物凄かつた。（と人）乞食だつ

た、彼女のドアをたたいて懐水みをおわすか

つた。しかし、彼女は死にあつて、教争（と人）

寄進（の人名と誤）して来た。

彼女の埋葬の後は、ひどい天候ではなかつ

た。いやらしい雨、さびしくおたやわな天候だつ

辰骨
 彼女は棺を^しめて、^{毛布}にくるまれたまま埋められた。

た。彼女は棺をきや^お明持ちの貸金と、善通

より^おわつと多くきかつて^蔵取んだのたか、

そ^おうしん役をする人^庫を雇うことか、女を

か^おみ^かつた。きまりまり入用な人^敷たけし

か、そ^おうしんは^いち^ちの^たた。——そ^おうしん^ジジョン。

ポールは例のごとく^いち^ちの^たの^をき出^して^いた。

^いち^ちの^たに^いち^ちの^たを^おおせ^ようと^時、お師は^おか

んで^いち^ちの^たの^一ダリンと^言の^義もの^を、^辰

の^上に^招げ^た。そ^うしん^低聲に、^口を^んじ^が

金^銭は^をん^じと^とも^いち^ちの^たと、^まつ^たち^ち

たつた。

それゆゑと、牧師は高き足り考つた。其

備ひ引く人達も考つた。 あんな 一人の招明持

ち、シヨベルで土を掃き入る、墓守と

子を 十分な 仕事は 十分な 仕事

はしなかつた。 あんな、それは日曜日だつ

た、教會の参詣人達は、墓地に あんな 行く

人 あんな 墓守を替へる。墓守は あんな

自分で行つて見な、 あんな 伴がやつ

たより、もっと悪い状態になつてゐると思

落し合った連中へ

つた。

ちやうどその時分

ジョン・ポール

まゝまゝあ半ばう

かしげ、半ばいらいらした妙な様よで、

髪をうろついていた。一度下すれば、自

分のいまの住居とはうってかわってきりや

旅籠に泊った。徳吉は、すこし金もありつ

いたので、もつといの家を探していったと、

問わす言ひは、
奥の部屋に居た。

口ふむ、そりやあ、
と、あ

晩、連中のよらの鑑治屋の言つた。可わしだつて

? え?!

曰 ~~お~~お前さんは、人の心持つてものも

考へなくちゃいけないよ。山と亭主は言ひ

た。曰そんなことを言われちゃ、ポール親方

曰 ~~あ~~あ、いゝ氣はしないぜ。 そこはそりなん 介 あはれ?!

曰有る、ポール親方は氣んしや あはれ

よ。山と、鍋治屋の言つた。曰親方は、あま

みやあ、おいふんをぬいことを他人でなすつた

の、 あはれ 承知だあ。あしはただ、

あすとか好ぬきんをぬえと、言つておけ

のことさ。^{とあひら} 甲い鐘の音や、埋葬の時の^{たじまつ}招明や、

^{さるニフ}で、墓は誰いそびいいよい時よ、静めれぬえ

^{せうま}つふんだ。ただそろん光かあるといふことだ

が——^{ポール親}お前さんは一つと光を見

たことはまいいぬ？」

可ああ、~~見~~見たことは有い。と、ポー

ルは、^{いぢら}澁面つらつて言 ~~ま~~ まー一お

酒をほえくた。そしと~~お~~おそく、^りりつて^行行つ

た。

その後、^か二階^のでベットに寝ころぶと、

もう

ふくらんだばねいれでしる。まあそれだけなよるな

受ももの 墓地のい プールには十分おぼえのある 地

~~と~~ 占大 かり、スーッと立ちあがった。プールはへ

ツドの身を揺けて、息を殺した。

向をそく、~~葉~~ カサケ 或るものには、窓扉を

いかにも カサケ ね、が夕が夕鳴かした。恐ろ

しい嫌悪に駆られて、プールはその方へ眼を

むけた。おお！ 彼と月光との間に、妙な

はねた頭をうしろ黒い輪郭があつた……かと思

うと、のかたち ~~その~~ は ~~豪華~~ 都屋の中に入れた。

床板の上の、乾いた土は、~~カ~~ラ~~カ~~ラと鳴っ

た。低い、ひび割れた音が言つた。句どこれ

あるか知ら？~~カ~~——そ——、やつとあるけ。

よくぞ、よろめく足どりぐ、こころしこをあ

らした。

ちりちり見えるところができたのだが、それは、

部屋の隅々をのぞきまわつたり、椅子とい

椅子の下へかみ~~カ~~えたりした。ところ~~カ~~ところ~~カ~~

の戸~~カ~~板の隙をいじくり~~カ~~んと~~カ~~と思つと、

かタンと~~カ~~開ける音が~~カ~~した。つかいて、からつ

無行一字りり

ほの相も、長い爪でガリガリ掻^か音^ね——その
かたちは、~~ををを~~ ベッド^のぐりりをかぶるわ

つたが、一瞬まぢどま^り、しゃがれた聲で
叫んだ。——口お前が、とつたのだね！

——ここでシエークスピアのマミリアス王

子^この^こ子^こ、この話すりもすつと短かい

話をしんだらうと筆者は思ふのだ^がは^い並^まみ

居る侍女のうちの、いちばん^筆の^目かけ

く、だしぬけにワツと叫んでおびつく。その

侍女もおなじく~~筆~~、あれえ！と叫ぶ^が

母の
るハーマイアニ王妃は、すぐ王子を

かまえて、^口き出したくなるのをこらえなが

ら、きびしくゆすり、軽くおろしてたしなめ

る。止して聲をあらため、ややほき出しそ

れたつた王子は、^{早くも}ベッドへ送られ^{よう}とする。

だが、やつと^手ききの氣をとり息した侍女^手

のとりなしで、王子は、どうにか^くいつもの寝

る時間まで、そこにい^いることを許さ^れる。

とい^いは^れ取りだ^つたろ^う。

そして、その時間までには、王子^をまた

機嫌を取り直し、みんないゝおやすみ"と言

いすのりも、^{手ぶら}三倍も恐ろしい話を、もろ

一つ知つてゐる●んだ ^{から、こんどの折には}

話さう ^と 取取りたつたろ。

一行ノケ

以下全部 書きかたの書きかた
カ活みに心使はす。

以下全部 カガ。

【附記】シエー
冬物語 第二幕

第二幕の終りは、こゝをうたう。――

王妃。 ^{おのり} 貴方は、ちんたる賢いことじや。

こゝへ ^{おいで} 母も 貴方と。

あ ^お お話をし

くれ。

王子。陽氣をお話？ 陰氣をお話？

王妃。いっところ陽氣なもの。

王子。冬には陰氣をお話、いっところい。

^に _{スカーレット} _{ゴッソリ}
私は地精や思鬼のお話か事あるの。

王妃。お聞かせ。それでいい。ここへ来て

おあけ。おいで。そしてしつかりやって、

この母を、お前の地精で驚かすのをおくれ。

お前は強い子だ。

王子。ある男か——

王妃。さあ来て、おあけ。それから？

王子。殿は男か、教令堂の巻のほりり候

んでいまして。——私は、そつとお話

しましよ。 ^{こころが} ~~ま~~の ^{こころが} 糖餅に開かれはな

りやい。

王妃。では、もつとそばへ来て、母の身に

そつと云うよ。